事故つがいの夫が俺を離さない！　2

「どんな強敵が現れようとも、俺は君を誰にも渡さない。君は俺だけのつがいだ」
俺を丸ごと肯定してくれる人がいる……やはり俺は幸せ者なのだ。
クラウス・モンテカルスト
モンテカルスト公爵家の後嗣。
エルフィーの夫でありつがい。
エルフィーを一途かつ
激重に愛している。
登場人物紹介
エルフィー・セルドラン
魔法薬品会社
「セルドランラボラトリー」で
オメガの地位向上のために
がんばっている。
幸せであることに、
どこか後ろめたさを感じている。

「――僕がソンリュンさんに愛を贈りたい」
ニコラ・セルドラン
エルフィーの双子の弟。
かつてはエルフィーに
複雑な想いを持っていたが、
ソンリュンとの出会いによって
変わっていった。
「過去の行いを、君たちに心から謝罪をする」
フェリクス・アーシェット
かつてエルフィーが
憧れていた相手。
宰相である父親によって
国外に追放されていたが――？
「そなたは私の運命のヒバリ……私の運命のつがいだ」
オウジュン・ファン
シャオレンの王太子。
国外の製薬事業に興味があると言って、
エルフィーの前に現れたが――？
「二人で人生の全てを分け合って、幸せを創造して参りますから」
ソンリュン・ヘイズ
シャオレン出身の芸術家であり、
ヒバリのペンダントの製作者。

目次

事故つがいの夫が俺を離さない！　2　7
番外編　クラウスの回顧と現在、未来　377

事故つがいの夫が俺を離さない！　2

第一章　春はそこまで

年間を通じて穏やかな気候のリュミエール王国にも四季がある。

俺――エルフィー・セルドランの最愛の人であるクラウス・モンテカルストと一度目のつがいになってから、六つの季節が巡った。

一度目のつがい……俺たちが『事故つがい』になったのは、約一年半前の秋のことだった。

――この世には、男女性とは別に、アルファ・ベータ・オメガという三種の第二性（バース）がある。

神に与えられた優秀な遺伝子を持ち、ヒエラルキーの頂点に君臨するアルファ。どの国でも国王や官職など、国を動かすのはほぼアルファで、クラウスはそのアルファだ。

次にベータ。アルファを超えることはないものの、努力により能力が向上する人も一定数いて、アルファの補佐役として活躍する他、大きな事業を興（おこ）している人もいる。

最後に俺のバースであるオメガ。男女共に生殖機能を持ち、アルファを誘惑する誘淫フェロモンを持つことが特徴で、三月（みつき）に一度、平均七日間フェロモン量が増す『発情期』がある。

この時期にアルファと交接し、アルファがオメガのうなじを咬むと『つがい』が成立するのだが、つがいは結婚とは違い、どちらかの命が尽きるまで解かれることのない生涯の結びつきだ。

ただ、互いの合意がない状態でつがいが結ばれる場合がある。

それが『事故つがい』だ。

約一年半前の秋、アカデミーの治癒魔法科を卒業した俺は、プロムパーティーの夜に片想いの相手である商業流通科のフェリクス・アーシェットに告白を決行するはずだった。

ところが行き違いがあり、待ち合わせ場所に現れたのは疎遠になっていた幼馴染のクラウス。

俺を嫌っている上、俺の双子の弟ニコラの片想い相手がなぜここに、とパニックになった俺は、ひょんなことから発情（ヒート）を起こしてしまった。その結果、俺たちは事故つがいになったのだった。

ただクラウスは、幼い頃から俺とつがいになることを強く望んでいたそうで、すぐに俺に求愛し、プロポーズをしに訪れた。

しかしながら当時の俺は、ニコラとクラウスが想い合っていると信じ込んでいたため、クラウスの求愛はつがい契約による誤認であると思っていた。

ゆえにクラウスとニコラに正しくつがいを結んでもらうべく、研究中だった『存命状態でもつがいを解消できるつがい解消薬』を完成させて、つがいを解消しようと躍起になっていた……俺も幼い頃からクラウスを想っていたことを、自分自身でも気付かずに。

そして冬。俺への愛憎心から、俺とクラウスのつがい解消を計画したニコラと、『つがい解消薬』の協賛権利を欲して計画に加担したフェリクスにより、つがい解消薬の試作品が使われ、俺たちのつがいはいったん解消された。

けれど紆余曲折の末、本当に愛する人はクラウスだと気付いた俺は、彼とつがいになることを心

から望み、二度目のつがいを結んだ。
その後、間を置かずにセルドラン姓からモンテカルスト姓となった俺は、実家の家業である癒薬品会社『セルドランラボラトリー（通称セルドランラボ）』の仕事と並行して公爵家夫人教育に取り組み、クラウスが騎士団の新人遠征を満了した翌秋に結婚式を挙げた。
癒薬品というのは、オメガの手のひらから誘淫力のないフェロモンが出ることと、そのフェロモンに治癒効果……『治癒魔法』があることを発見した俺の曽祖父が考案した製薬品のことだ。
俺も曽祖父の遺志を引き継いで治癒魔法士となり、結婚後の今もラボの仕事を続けている。
曽祖父の遺志、それは『治癒魔法を広く浸透させ、社会的地位が低いオメガが活躍できる世の中にする』ことだ。
オメガは卑しいバースとされている上、発情期間中は社会活動を中断することになるため、無益なバースとして蔑まれており社会的地位が低い。ちなみに東方の国へ行くほどバース差別が強く、厳しい身分制度を設けている国もあるほどだ。
ただリュミエール王国では、オメガの治癒魔法の発見と広まり、そしていち早い当時のモンテカルスト公爵の支援もあって、オメガの社会的地位は向上傾向にある。
さらに、俺とクラウスが事故つがいになった頃、国内で疫病が大流行した。その際、セルドランラボは予防薬と治療薬の錬成で疫病終息の一翼を担った。
それにより国王陛下がオメガへの理解促進と待遇改善を進めてくださっている。
とはいえ、差別意識を持っている人はまだ多い。だから俺はこれからも、モンテカルスト家の公務とラボの仕事を兼務し、オメガの活躍の場を広げる努力を続けたいと思っている。
――ともかく季節は巡り、現在はクラウスと過ごす二度目の冬の終わりだ。
リュミエール王国の冬は短いけれど、この冬もモンテカルスト公爵家の庭園の噴水には氷が張ったし、春の訪れを告げる花が咲く今の時期になっても、ぐっと冷え込む朝がある。
けれどそんな朝でも、俺は陽だまりの中で微睡んでいるかのようだ。
それは寝室の暖炉に火が残っていることだけが理由じゃない。
「目覚めたか。おはよう、俺の世界」
夫夫の寝室の上。愛してやまないつがいのクラウスが、逞しい腕で俺を包み込んでくれているんだもの。
この明け方で、俺の発情期も明けた。
俺は夢見心地でトロンとしていた瞼をしっかりと開き、クラウスと視線を合わせた。
「ん。おはよう、クラウス」
数時間前まで愛し合っていたから、二人ともまだ一糸纏わぬ姿のままだ。
俺が今しがたまで顔を埋めていたクラウスの胸は、『リュミエール王国の若き黒豹』と称揚されるだけのことはあり、いつもふかふかで温かい。
おかげで俺は冷え知らず。幸せを感じながら、もう一度クラウスの胸に顔を埋めて、その肌の香りを大きく吸い込んだ。
今回の発情期間中もたっぷりと俺を愛してくれたクラウスの肌には、彼のフェロモンの香りがま

だ残っている。焙じたコーヒー豆のようなこの香りが、俺は大好きだ。
「エルフィーの甘い香りがまだ残っているな」
クラウスも指先で俺のうなじに触れながら、つむじに鼻を擦り付けてくる。
「くすぐったいって」
俺はフフ、と笑いながら顔を上げ、クラウスの鎖骨にお返しの口づけをした。
すると、いつもと同じように腕で体を引き寄せられ、クラウスの鍛え抜かれた体の上に乗せられる。
次に黄金色の瞳にまっすぐに射貫かれて、俺はその眩しさに目を細めながら、クラウスの無言の願いを叶えるのだ。
顔を寄せ、唇を重ねる。
いつも俺を慈しんでくれる大きな手が後頭部に添えられ、口づけが深くなる。
数度顔の角度を変えて重ねたのち、温もりを残して唇をそっと離した。
いつまでも触れ合っていたいけれど、そろそろ時間だ。
発情期が明けたのだから、今日から寝室を出て日常の生活に戻るのだ。
顔を枕元に向けると、そこに置いてある幽霊人形……クーちゃんと目が合った。
クーちゃんは『俺が不在時のエルフィーのお守りだ』と言ってクラウスが購入した、三歳児くらいの大きさの人形だ。
東方の国の魂のイメージらしく、中に綿が詰め込まれた白い体は楕円形で、下部は尻尾のように

細くなり、短い手が付いている。また、別布で裂けた赤い口と黄色の目も縫い付けられていて、目は黄金とまではいかないけれど、黄色の瞳に藍色の瞳孔だ。
初めは気味が悪かったものの抱き心地が意外にいいし、目の色がクラウスの瞳に似ている。だからクラウスの名前をアレンジしてクーちゃんと命名し、今では俺のお気に入りの抱き枕になっている。
「クーちゃん、おはよ」
人形の頭を撫でたのち、穏やかな面持ちのクラウスと揃って体を起こした。
気付けば、俺がクラウスの衣類を駆使してこんもりとベッドに積み上げたはずの巣は崩れ、波打つシーツと化している。俺がそれらを両手いっぱいに抱き上げ、顔を埋めてクラウスの残り香を探していると、寝衣を身に着けたクラウスにそれを奪い取られてしまった。
「本物はここにいるんだがな。足りなかったか？」
「あっ！」
ちょっと拗ねたようなクラウスの声に抵抗しようと手を伸ばす。
けれどすぐにクラウスの腕が回ってきて、コーヒーの香りがする胸の中で唇を重ねられた。
「ん……クラウス……」
あれだけ愛されたというのに俺は貪欲だ。クラウスの情熱的な口づけに夢中になってしまう。
「――さあ、ひとまずこれでいいな」
「へ？　あれ？」

髪を梳(と)かれながらの口づけに蕩けていると、いつの間にかしっかりと寝衣を着ていた。
いや、着せられたのか。
一番上のボタンまでちゃんとかかっている上に、ササッとではあるものの髪も整えてくれたらしい。
さすがクラウス、なんという器用さだ。と感心したその直後。
「エルフィーちゃーん、ついでにクラウス、今朝のご機嫌はいかがかしら～？」
ノック音と共に、控えめなお伺いの声が耳に届いた。
俺のお義母(かあ)様であるモンテカルスト公爵夫人だ。
お義母(かあ)様は、俺たちが二度目のつがいになって以降、寝室への突撃を遠慮してくれるようになっている。
俺の発情期は、前回の発情期から三十日後の五日間周期で滅多に狂うことがなく、今朝で終わる予定だと前もって伝えてあったので、様子を見に来てくれたのだろう。
俺は自分でドアを開けに向かい、顔を見せた。
「おはようございます。お義母(かあ)様。もう大丈夫です」
「ああ～～エルフィーちゃん、会いたかったわ！」
お義母(かあ)様は満面の笑みでそう言うと、前室に一歩足を踏み入れるなり、ガバリと俺を抱きしめる。
後ろには二人の侍女さんが控えていた。
早速侍女さんたちは俺を更衣室に誘導し、身なりを整え始めてくれる。

俺とクラウスが生まれるより以前、『リュミエール王国の芽吹きの蕾(つぼみ)』とまで賞賛された女性騎士たちに身の回りの世話をしてもらうのは恐縮ものだ。彼女たちの主(あるじ)で、女性騎士団団長であった『咲き誇る薔薇』たるお義母(かあ)様の指令がなければ、そんなことはありえない。侍女さんたちは粛々と任務を遂行するし、俺もお義母(かあ)様の采配に従うのみ。
すっかり支度が整えば、待機してくれていたクラウスとお義母(かあ)様と共に、本宮の朝食室へ向かう。
といっても俺の隣を歩くのはお義母(かあ)様で、クラウスはその後ろに追いやられていたりする。
「やっぱりエルフィーちゃんがいると屋敷も心も華やぐわね。発情期明けの日ぐらい、ゆっくりと過ごせばいいのに」
声を弾ませたお義母(かあ)様の言葉に、すかさずクラウスが口を挟んだ。
「母上のそれは『ゆっくり私と過ごせばいいのに』でしょう」
「まっ！　クラウスったら、言葉は奥ゆかしく使うものよ。あなたはいつまでたっても唐変木ね」
「率直なだけです」
「んもう、可愛くない！　でもいいの、私にはエルフィーちゃんがいるもの。ねっ」
クラウスとのいつものやり取りの後、お義母(かあ)様は俺にニッコリと微笑んだ。
照れ笑いで頷くと、お義母(かあ)様は俺の顔をじっと見つめて、改めて体調を気遣う言葉をかけてくれる。
「本当に体調は大丈夫？　今日は早速大事なお仕事があるでしょう？　心配だわ」
「大丈夫です。俺の発情期はもともとそう重くないですから」

それに、クラウスのおかげで発情期明けは一番体調がいい。これはイコールつがいに愛し尽くされ、期間が充実したものだった、という証なので、それこそ率直に口に出すのは慎むけれど。
さて、朝食室に入ると、お義父様が既に着席していた。
「おはようございます、閣下」
「おはよう、久しぶりだね、エルフィーちゃん」
お義父様は俺の発情期には触れず、ごく自然に挨拶を返してくれる。
けれど、すぐにキリリとした眉を垂らして声を踊らせた。
「おお！　今朝の我が家のお嫁さんはいちだんと愛らしいね！」
我が国の国防長官であるモンテカルスト公爵は、国民から『リュミエール王国の猛き黒豹』と畏怖の念を抱かれる存在ながら、その実、慈愛に満ち溢れた方で、ユニークな面もお持ちだ。
任務時以外は俺のことを『お嫁さん』なんて言って、ご友人だけでなく部下の前でも鼻の下を伸ばして話している、というのはお義母様とクラウスの談だ。
俺はオメガでも男なので『婿』だと思うのですが……と苦笑しつつも、お義母様同様に俺を深く可愛がってくださることがこの上なくありがたい。
「そうでしょう？　だって今日はエルフィーちゃんがシャオレンの王太子殿下に謁見する日だもの。張りきってお洋服を仕立てたのよ」
お義母様が俺の姿を見て、誇らしげに頷いた。
シャオレンとは、長きにわたり諸外国との交流を規制してきた東方の国で、現在はファン王家が

統治しているのでファン王朝とも呼ばれている。
そのファン王朝が百年の節目を迎えた四年前、シャオレンの国王が初めてリュミエールを訪れた。もっとも、リュミエールから遠い国だ。その後目立った交流はない。
それが今回、危機的な疫病を国策で乗り越えたこの国に関心を持ったという王太子殿下が、私的に来訪している。そこでその策を講じた国議会議員以外に、癒薬品で協力したセルドランラボラトリーの代表として、父様と俺が謁見の間に召されることになったのだ。
そのため今日の俺は、シャオレンの生地で仕立てられた上着を着ている。
生地は艶やかな藍地のブロケード。長い冠羽と尾を持つ東方の鳥とピオニーの模様が金糸で織り込まれている。袖口が広く、飾り紐のボタンが特徴的な、シャオレンの民族衣装の要素を取り入れた素敵な一着だ。
もちろん、以前クラウスからプレゼントしてもらった大事なヒバリのペンダントも忘れていない。
今日は上着の下で俺を見守っていてくれる。
「エルフィーは存在そのものが美しいから、どのような衣装を着ても映えるな」
わわ、今日もクラウスが俺を過度に賛美してくる。
俺とつがいになる以前の『堅物・真面目・唐変木男』とはまるで別人だ。
顔を合わせるたびに愛情たっぷりの瞳で俺を見つめて、甘い言葉を紡ぐ。そうやってロマンス小説愛読者の俺が憧れてきた振る舞いをするものだから、俺は毎日身悶えしてしまっている。
ただしクラウスの饒舌は、俺に対して限定だ。

以前お義母様が、クラウスは俺の前でだけ人間になれると教えてくれたように、彼は今でも俺以外の人に対しては表情が硬く口数も少ない。それがまた俺の心をくすぐる。
俺はクラウスに笑みを向け、鍛え抜かれた硬い腕をそっと撫でた。
「クラウスだってなにを着ても素敵だよ。俺の愛する夫は、いつどんな時でもかっこいいからね」
そう言えば、クラウスは途端に頬を赤くする。冬から夏になるまでの時期は、鍛錬で焼けていた肌の色が本来の色に戻るので、顔色がわかりやすい。
あ～～俺の夫はカッコよくて可愛い。最高！
俺にだけそうなるの、嬉しいから他の人には堅物・唐変木男のままでいてほしい。
「尊いわ～」
おっと、また二人だけの世界に浸ってしまっていた。
慌てて意識を戻すと、お義母様がこちらに視線を向けて微笑んでいる。まだ朝食に手を付けてもいないのに、美味しい料理を口にした時のような表情だった。
視線を移せば、お義父様もそっくり同じ表情で俺を見ている。
反対に、俺はきりっと頬を引きしめて背筋を伸ばした。
「お話の途中で申し訳ございませんでした。お義母様、素敵な衣装のご用意をありがとうございます」
「もうっ、エルフィーちゃんたら！　モンテカルスト姓になって半年も経とうというのに、いつまでも他人行儀なんだからっ。いつになったら『ママン』って呼んでくれるのかしら」

――いえいえ、モンテカルスト家の一員になったからこそ振る舞いに気を配らなければなりませんし、俺ももう立派な社会人ですので、それは何年経っても無理そうです。
そう思いつつも口に出すのは忍びないので、内心で謝り、微笑みで誤魔化す。
お義母様は「んもうっ」と体を揺らすと、シャオレンについての話題を切り出した。
シャオレンの国王であるファン陛下が公式訪問をされた際に、お義母様はお義父様と一緒に拝謁したそうだ。また、昨年の夏にシャオレンから渡航してきた芸術家と交流があるという。
「シャオレンはこちら西側の諸国とは思考も文化も違っていて興味深いわ。だけどいまだにバースを基にした厳しい身分制度が残っていて、とくにオメガ性への人的投資が遅れているのよね」
「そうなのだ」
残念そうな表情をしたお義母様に頷いて、お義父様が補足する。
「だが今回、オウジュン・ファン王太子殿下は我が国のオメガ性の活躍にたいへん興味を示されていてね。殿下は、昨年立太子されると共にシャオレンの製薬事業を国王から引き継がれた。そのため国外の製薬事業にも関心を向けておられたようだ。そしてなんと」
そこでいったん言葉を切ると、お義父様はどこか誇らしげな表情で俺を見た。
「昨日陛下から伺ったのだが、殿下は既にセルドランラボラトリーとエルフィーちゃんの活躍を聞き及んでいたそうで、エルフィーちゃんとの引見は殿下自らのご希望だそうだよ！」
「えっ！」
思いもよらない言葉に、俺は目を丸くしてお義父様に訊ねた。

「遠い東方の国に俺個人の情報まで伝わるなんて、いったいどういう経路でしょう」
「功績というのは自然と広まるものだよ。現に昨年、隣国からラボに視察があった際も、エルフィーちゃんは質問責めにされていたじゃないか。さすが我が国で最も治癒魔力が高く、癒薬品錬成に功績を挙げているエルフィーちゃんだ！　我が家自慢のお嫁さんだよ！」
はっはっはっ！　と豪快に笑うお義父様の口髭まで自慢げに見えてくる。
俺は恥ずかしくなり、身をすくめた。
ラボの功績は、スタッフが一丸となって行なう研鑽と相互協力があってこそだ。俺一人で築けるものじゃない。それに俺の魔力は元から備わっていたものだ。もちろん努力はしてきたけれど、会えなくなって久しい双子の弟ニコラに顔向けできるようにと積み重ねてきただけ――
……ニコラ、会いたいな……
俺は頭に浮かんできたニコラに思いを馳せる。
ニコラ・セルドラン、俺の双子の弟。
双子ゆえに俺に愛憎入り混じった複雑な感情を抱き、俺といつまでも対等でありたい、と強く願う気持ちから、危険な薬草エキスを過剰摂取した。そして、その副作用から、俺と異なってしまうことは自身の存在意義を失くすことだという妄執に取り憑かれるようになってしまった。
そんなニコラは、俺とクラウスが事故つがいになったことでついに心を壊し、本来の彼からは考えられない行動に走って――今は薬草エキスの解毒治療を終え、教会附属の孤児院で奉仕活動をしている。

父様と母様やお義母様から随時ニコラの様子を聞いているし、季節の変わり目などに返事を求めない手紙を送ることにしているけれど、俺とニコラを繋いでいるのはそれだけだった。
『いつか、ちゃんとごめんなさいとありがとうを伝えに行くね』
結婚式の手紙に書いてくれたその言葉を信じて待つことしか、今の俺にはできない。
「エルフィー」
いつの間にか唇を噛んでうつむいていると、背にそっと手が添えられた。
クラウスには、俺がニコラのことを考えていたのだとわかるのだろう。労るように背を撫でてくれる。それから、「謁見の間まで送っていこう」と申し出てくれた。
優しさをたたえた黄金の瞳に小さく頷けば、お義父様もお義母様も続けて声をかけてくれた。
「私も同席するし、お父上もいらっしゃる。なによりエルフィーちゃんは我が家の自慢のお嫁さんだ。この半年間努力を惜しまず、モンテカルスト家の公務を単独で果たすまでになってくれた。緊張は不要だよ。堂々としているといい」
「そうよ。背筋をピーンと張って、私の自慢の可憐な笑顔と類まれなる才能をシャオレンの王太子殿下に見せつけていらっしゃいな！」
緊張よりもニコラのことが気がかりだったのだけれど、『猛き黒豹』と『咲き誇る薔薇』の励ましに自然と口元が綻ぶ。
俺は朝食をしっかりと食べて気持ちを入れ替え、お義父様とクラウスと共にモンテカルスト家の馬車に乗った。

リュミエール王国の王城は、その絢爛さや豪奢さ以上に張り詰めた威厳に満ちている。
国王陛下に婚姻の許可を得るためや、その後の公務でも何度か訪れたけれど、元平民の俺にはなかなか慣れるものではなさそうだ。いよいよ緊張してきた。
反対に、俺をエスコートするクラウスは堂々としたものだ。
謁見の間の前に着けば、俺が掴まっていない方の手で、手にぽんぽん、と触れてくれた。
「いつもの君でな」
慈愛に満ちた眼差しと励ましの言葉に緊張が和らぐ。
俺が頷き、クラウスの腕から手を下ろすと、クラウスはお義父様——閣下と俺に一礼し、任務へと向かった。
「国王陛下、ならびにシャオレン国王太子殿下がおいでになるまで、ご着席にてお待ちくださいませ」
謁見の間に一歩入ると、待機していた侍従長に案内され、用意された座席に閣下と共に進む。
室内には父様と国議会議員が数名既に座っていた。その中にはアーシェット宰相もいる。
宰相は俺と目が合ったものの、即座にそらした。第三子息のフェリクスを家門から排斥することになった原因が俺にあるので、忌々しく思っているのだろう。
……フェリクスもどうしているのだろう。
フェリクス・アーシェット。アカデミー時代の同窓生だ。

アーシェット公爵家で唯一のベータ性だった彼は、アルファ性だと偽ることを強いられて育ち、家族や世間から認められるため、ひたすら成功を追い求めてきた。
そして『つがい解消薬』の協賛の独占権利欲しさにニコラと共謀し、俺とクラウスのつがい解消を実行した。けれどクラウスとお義母様の前で企てが明るみとなり——国外追放の処分を受けた。
裏切られたけれど、憎みきれない彼を頭に思い浮かべつつ宰相にお辞儀をした。
その後、そう待たずに護衛の声がした。
陛下とシャオレンの王太子殿下の来訪を告げる声だ。
列席者たちは玉座の前に移動し、許可があるまで低頭して入場を待つ。
俺は列席者の中で最年少なので、末尾で低頭した。
衣擦れの音がする。まずは陛下が玉座へ進まれているのだ。続いてシャオレンの王太子殿下も座席に向かって進まれる、と誰もが思っただろう矢先、俺は「ん？」と頭に疑問符を浮かべた。
どうしたのか、ブーツ型の絹靴を履いた王太子殿下の足が、座席ではなく列席者が並ぶ下座へと進んでくるのだ。
……んん？
俺の疑問が深まると同時に、リュミエール側の侍従長が「どうされました、オウジュン殿下」と戸惑いをのせた声を発した。
そうなって当然だと思う。なぜならオウジュン殿下の足が、俺の真ん前でぴたりと止まったのだから。

なんだ、これ。どういうこと？
理由もわからないまま、殿下の絹靴に刺繍された狼頭（ろうとう）ドラゴンの赤い瞳を見つめ、声がかかるのを待った。
その間に、以前にも似たような経験があったことを思い出していた。
そう、あれはクラウスと事故つがいになった翌日のこと。
ニコラの元に向かったと思われたクラウスが、瞼を開くと俺の前にいてプロポーズを……
いやいやっ！　あの時とは全く状況が違う。どうしてアレと重ねているんだ、俺は。
それにしてもどうして？　お辞儀の角度は意識している。不敬な振る舞いはしていないはずだ。
そう思っていると……
「見つけた。私の運命のヒバリ」
「え」
さすがに声が漏れてしまった。
――運命の、ヒバリ？
俺にしか聞こえないような小さな声だったけれど、聞き違いじゃない。オウジュン殿下は『運命のヒバリ』と、確かにそう言った。
俺は反射的に、ペンダントトップのヒバリを上着ごとギュッと握りしめた。
「そなた、顔を見せなさい」
オウジュン殿下の穏やかな声が頭上から聞こえてくる。

そう言われても、『運命のヒバリ』という言葉に混乱するばかりの俺は動けないでいた。
全身から変な汗が噴き出てくるのを感じる。ヒバリを握りしめる手にさらに力が入った。
「顔を上げなさい」
ささくれ一つないオウジュン殿下の手に、その手を握られてしまった。
声は穏やかなのに、握ってくる力はそれなりに強い。その不調和さに、俺の体は意図せず強張る。
「エルフィー」
「エルフィー君」
「セルドラン」
床とにらめっこしたまま動けないでいると、父様や閣下、陛下からも声がかかってしまった。
そして、とうとう、オウジュン殿下の声が苛立ちをはらんだ。
「早く顔を上げるのだ」
こ、これは、もう『命令』では？　このままうつむいているわけにはいかないよな？
俺はぎぎぎ、と音が鳴りそうなほど段階的に背と首を伸ばし、顔を正面に向けた。
ただ、背丈の差があるために、オウジュン殿下の顔までは目に入らない。
最初に見えたのは、重陽着（チョウヤン）と呼ばれるシャオレンの男性用民族衣装の胸元だ。
殿下が着用しているそれは、ガウンのような前合わせの長衣をいくつか重ねたもので、黒地に赤や金の糸を複雑に織り込んだ上等の生地で仕立てられている。
普段の俺なら、胸元や広い袖口にあしらわれた緻密な刺繍の美しさを楽しむだろうに、今はわず

かな心の余裕もない。
もっと顔を上げるべきか、それともこのままでいるべきか、二つの選択肢に葛藤していると、オウジュン殿下に顎をクイッと持ち上げられた。
「あっ……」
視線がぶつかる。
――闇だ。
瞬間、そう思った。
吊り上がった眦に宿る深い黒の瞳は、まるで全てを覆い隠す闇のようだった。
吸い込まれてしまうというよりも、存在ごと攫われるような感覚に襲われる。
背筋を冷たいものが這い上がり、俺はどうすることもできずに殿下の次の言葉を待った。
すると、殿下の薄い唇が綻んだ。
「間違いない。桃色の髪に翠の瞳。そなたは私の運命のヒバリ……私の運命のつがいだ」
東方の国の人なのに、流暢に西の――リュミエール王国の言葉を操っている。
そしてこの言葉は俺だけではなく、謁見の間にいる全員に届いたらしい。一瞬にしてざわめきが静けさに変わった。
――そんなわけない。殿下はいったいなにを言っているんだ……！
俺が畏れと困惑で静止していると、陛下の低い声が助け舟を出してくれた。
「オウジュン殿、彼にはつがいの伴侶がおりますゆえ」

その言葉に、細く整えられた眉をわずかに吊り上げたオウジュン殿下は、俺の上着の立て襟をめくってつぶやいた。
「つがいの……しるし？」
俺のつがいのしるしは、うなじにまで視線を巡らせなくてもすぐに他人から見える。
クラウスが対面で咬んだので、首筋にかかっているからだ。
「なるほど」
殿下にもすぐに見えたのだろう。そう言って襟元から手を離すと、あっさりと俺に背を向けた。
俺だけではなく他の列席者も唖然としている中、座席に座った殿下は陛下になにかを言っている。
陛下は大きく頷くと、皆に向けてにこやかに説明を始めた。
「シャオレンでは運命のつがいという伝承があり、それをモチーフとした伝統工芸品が作られているそうだ。セルドランの姿がその工芸品にそっくりだったため、たいへん驚かれたとのことだ」
それを受け、殿下も苦笑を見せつつ流暢なリュミエール語で話した。
「物により材質が違うが、どれも桃色の体に翠の瞳が付いている。しかしシャオレン含む東方の国の者は皆、黒髪に黒目なのだ。初めて同じ色味を持つ者に出会い、高揚してしまった」
ああ、そういうことだったのか、と俺はホッと安堵の息を吐いた。
ヒバリが東方のどこかの国のアクセサリーだとは知っていたけれど、シャオレンの工芸品だったとまでは知らなかった。
他の列席者も陛下の言葉に軽く頷いたところで、着席の許可が出る。

ところが、俺は再び戸惑うことになった。
挨拶と自己紹介から続く今の合議中、オウジュン殿下の視線が俺に留まり続けているのだ。
いくらヒバリと同じ色だからって見すぎじゃないか？
国議会議員たちも気付いて、訝しげにしている。
俺はリュミエールでは見ない黒い瞳にまだ慣れず、失礼だとは知りつつ、うつむいて殿下の視線から逃げていた。
そして、国議会議員の一連の発表が終わり、父様が疫病流行時のラボの活動について発表する番になった時だった。
父様が席を立つと同時に、殿下がそれを遮った。
「セルドランラボの活躍については既に承知ゆえ、エルフィー殿と直接話をさせてほしい」
父様も俺も予期せぬその言葉に瞬き、揃って殿下に顔を向ける。
殿下の視線は揺るぎなく、やはり俺に留まっていた。
「今回、私はあくまで私的に訪問している。本来であれば形式張ったこのような場は避け、今日にもセルドランラボに参りたいところであったのだが、リュミエール国王の顔を立てたのだ」
殿下はそこでいったん陛下と議員に微笑むと、俺にも柔らかな笑顔を向けた。
今日初めて向けられたその笑みに、わずかながらも緊張が解れる。
そして、穏やかに紡がれた殿下の次の言葉に、俺は今朝のお義父様の言葉を思い出した。
「議員方の話も終わりを告げたところで、訪問の第一目的である治癒魔法について詳しく知りたい。

ぜひ前途ある若き治癒魔法士のそなたより聞かせてくれぬか」
――そうだ、殿下は自ら俺との引見を希望したと聞いた。
殿下は二十四歳とのことだから、同年代の俺に興味を示したのかもしれない。
これは治癒魔法について、オメガについて理解してもらえるチャンスなのだ。
お義父様――国防長官に視線を送ると「話しなさい」というように頷く。
俺は息と一緒に緊張を呑み下し、治癒魔法について語り始めた。

合議は太陽が真南に昇る時間に終わった。
陛下とオウジュン殿下が退室したのち、俺と父様は全国議会議員に頭を下げて退室を見送った。
なぜなら、途中からつい熱が入ってしまった俺は、治癒魔法のこと以外にひいおじい様から引き継いだ遺志を熱く語ってしまったのだ。
しまいには『オメガの治癒魔力は可能性に満ちており、医術の進歩を発展させられるはずです。どうか貴国でもオメガ性への投資をご検討ください』とまで息巻いて。
いくら殿下が熱心に耳を傾けてくれたからって、他国の方針に意見したも同然だ。不敬がすぎる。
話し終わってからハッと気付くと、父様はハラハラした面持ちだった。陛下と国防長官はにこやかだったものの、議員の皆さんは呆れた様子で、特にアーシェット宰相は……
「エルフィー、大丈夫か？」
うつむいていると、見送りに付き合ってくれた父様が背を撫でてくれた。

「うん……平気」
口角を上げてみたものの、ちゃんと笑えているだろうか。
父様が気にかけてくれているのは俺の失敗ではなく、アーシェット宰相が謁見の間を出ていく際に俺に放った言葉だろう。
『次期モンテカルスト公爵夫人はオメガであるのに、いまだ吉報が届かない。ずいぶんと王太子殿下に取り入っていたようだが、淫らなフェロモンでも発していたのではないか？　いっそつがい解消薬でも使って身軽になり、シャオレンの後宮に入られてはいかがか』
宰相の言葉は孕む性への明らかな侮蔑だった。そして、確実に俺の心を抉った。
俺とクラウスが結婚してから約半年、二度目につがいになってからでは約一年半以上になる。オメガの妊娠率は発情期間中が最も可能性が高いとはいえ、それ以外の交接でも充分可能だ。だというのに、俺の体には新しい命が宿る兆しがない。
「エルフィー！」
ふぅ、と深く息を吐いて、やるせなさも一緒に吐き出そうとしていると、回廊の向こうから俺を呼ぶ愛しい声がした。
昼休憩に入ったらしいクラウスが、わざわざ見送りに来てくれたようだ。
「……気疲れしたか。顔色が悪いな」
クラウスは俺の前まで足早にやってくると、そっと頬を包んでくれる。
「クラウス殿、それが」

「父様！」
大きくて温かな手に慰められていると、父様が口を開いた。
きっとさっきのことだ。俺はブンブンと頭を振ってそれを止めてもらう。
クラウスもお義父様もお義母様も、新しい命を待ち侘びてくれているだろうに、なにも言わないでいてくれる。俺もそれに甘えて口に出したことがない。だけど実際はいつも気にしていることを、知られたくない。
「エルフィー？」
クラウスに顔を覗き込まれる。つい目をそらすと、突然縦に抱き上げられた。
「わ、わわ、クラウス」
「お父上、エルフィーの身体をしばしお借りします。のちほどラボに送り届けますので、どうぞご心配なさらず」
クラウスが俺を抱き上げたまま頭を下げると、父様はなにも言わずに頷く。その顔に浮かんでいるのは、クラウスに頼もしさを感じているような笑みだった。
「なあ、クラウスってば、ここは王城内だぞ。下ろして！」
結局、俺は抱きかかえられたまま回廊を渡り、王城の第三庭園にあるガゼボに連れていかれた。
クラウスは石造りのガゼボの長椅子に腰掛けると、俺を膝の上に横抱きにする。
「恥ずかしいよ、下ろしてってば。ここに来るまでにも数人に振り返られたのに、こんな姿を見られたら、この国の若き黒豹たるクラウスがどんな噂をされるか！」

ガゼボの中とはいえ、人が前を通りすがれば俺たちが見えるだろう。それなのにクラウスは全く動じる様子を見せない。それどころか、自身の左肩に掛けていたペリースを外して俺に掛けた。
「大丈夫だ。ここは背の高い常緑樹に囲まれていて昼間は陽が差さず、今の冷える時期は人の出入りがほぼない」
そう言いながらペリースを整え、俺をすっぽりと包み込む。
ペリースはクラウスの体温と香りを存分に感じさせ、不覚にも張り詰めていた気持ちが緩んでしまう。けれど、ホッとしたのも束の間だった。
「さあ、なにがあったのか話してくれ」
真剣な面持ちで顔を覗き込まれてしまい、俺は咄嗟にうつむいた。
「っ別に、なにもないって。謁見で気疲れしただけだってば」
「エルフィー。我々は夫夫だ。なにもかも二人で分け合うと誓っただろう。君の辛さの半分、いや、本当なら全てを請け負いたいと俺は思っているんだ。頼むから俺にだけはなにも隠さないでくれ」
クラウスはそっと俺の顎を掬うと、黄金色の瞳をまっすぐに向けてくる。
その真摯な眼差しには、確かな温もりが宿っていた。
しだいに心の波が凪いできた俺は、胸を重くしていたアーシェット宰相の言葉と、自分自身でもそれを気にしていることを打ち明けた。
「――だから近々、産術医さんに診てもらおうかな、とは思ってるんだけど」
クラウスはじっと黙って聞いていたけれど、そこで初めて口を挟んだ。

「体調チェックという意味でなら受ければいいが、子ができない不安からであれば必要ない」
「え……どうして」
「その原因が俺にあるからだ」
「原因？　クラウスにどんな非があるんだよ」
ドキリとさせられる。原因があるなんて言い方、クラウスの健康チェックでなにか指摘があったのかと不安になってしまうじゃないか。
ところがクラウスの口から出たのは、唖然とするような言葉だった。
「原因は間違いなく、俺が『エルフィーを独占していたい』と強く願っているためだ」
「へっ？」
「俺たちの元に新しい命が授けられるのはむろん幸せなことだ。だが俺は、それを第一として君のうなじを咬んだわけではない。君を愛し、君の傍らにいたいからつがいとなり夫になった。それにだ。俺は君に近付けなかった六年間をいまだ取り戻せていない」
黄金色の瞳がきらりと光る。会話を始めてからずっと俺を映しているそれに、改めて心ごと射抜かれた。
「もうしばらくの間でいい。君と二人だけの日々を俺にくれないか？」
「は……もう、クラウス！　おまえって本当に」
射抜かれた心がジン、と熱くなった。
きっとこの言葉は、半分は俺の気持ちを軽くするための気遣いで、半分は本気なのだろう。けれ

どその半分ずつの両方とも、俺を愛してくれているからの言葉だとわかる。
膝に抱かれたこともう気にならず、俺はクラウスの背に腕を回した。
「そうだね。俺もクラウスと同じ気持ちだからだな！」
「そうか。ならよかった」
俺がやっと笑うと、瞼を閉じたくなるほど優しい指遣いで髪を梳いてくれる。
眼差しも声も優しくて、蕩けてしまいそうだ。
けれど続くクラウスの言葉に、俺は再びうつむいた。
「それはそうとして、結婚してからのエルフィーの日々はめまぐるしかった。モンテカルスト家の公務に『つがい解消薬』完成に向けての錬成。俺が遠征で助力になれない時も、あらゆることにおいて全力で、寸暇も惜しむように取り組んでいたと父上母上から聞いている」
寸暇を惜しむように……クラウスは言葉を選んでくれているけれど、あることを気にして一心不乱にやっていたことを見透かされているようで居たたまれなくなる。
クラウスはそんな俺にそっと顔を寄せ、瞳を覗き込んだ。
「さらに君は、大きな気がかりを持ち続けているだろう？」
胸がドキリと跳ねた。俺のことを常に気にかけているクラウスには、やはり気付かれていたのだ。
俺は……
「幸せであることにも、幸せになることにも、エルフィーは罪悪感を持っている」
クラウスに言い当てられて、無言で唇を噛む。

この一年半は、確かにめまぐるしかった。公爵家夫人教育の課程を終えると間もなく公務に就いた。それに加えて、日々のラボの業務や疫病の予防薬・治療薬の増産錬成、研究中だった『つがい解消薬』の完成――初めの頃は無我夢中で日々が過ぎた。けれど、ようやく慣れてきた頃に、俺は後ろめたさを覚えるようになっていた。
――こんなに幸せでいいのかな。
多くの人に支えられ、やるべきことに打ち込める日々。モンテカルスト家の人々に大切にされ、クラウスに愛されて守られている。この上ない幸福に包まれるたび、自問せずにはいられない。
――俺は、本当に幸せになってもいいのか？
ニコラは前向きになり、お義母様とたびたび外出しているそうだけれど、ニコラは自身の未来を、幸せを見つけることができるのだろうか。
心配したって俺には待つことしかできない。それしかできないから、自分が幸せであることが間違っているような気持ちになる。
反面、あの出来事の先に繋がった幸せ――クラウスを目一杯大切にしたい気持ちと、気付けば実際に与えられる幸せにどっぷりと浸っている自分がいる。そして、またそれに罪悪感を抱き……と、俺の心の中も常にめまぐるしかった。
ニコラの心からの笑顔をこの目で見るまで、俺の自問自答は続くだろう。そして、もしニコラの苦しみが晴れていないのだとしたら、新しい命を望むことは間違っている気がする。
「……きっとじきに解決する」

クラウスは俺の髪を優しく梳き続けている。けれどそれ以上の慰めを重ねることもなければ、問い質そうともしない。クラウスは寡黙だけれど、過去のニコラに対する俺の浅はかな慰め方とは違い、心をまるごと肯定して寄り添ってくれる。
俺を丸ごと肯定してくれる人がいる……やはり俺は幸せ者なのだ。
「うん。そうだよね」
「ああ、だから産術医の診察はその時に考えればいい。診察の時は俺も共に受けよう」
「一緒に？」
思いがけない言葉に目を瞬いた。
産術医の診察を受ける男性なんて、リュミエールでは聞いたことがない。
それでもクラウスはさらりと言ってのける。
「ああ、俺たちはつがいで夫夫だから当然だ」
「それ、ホントに？」
思わず頬が緩んでしまうと、クラウスも笑みを返してくれる。
クラウスは俺の全てを請け負う気概がある。その温かい気持ちと笑顔を受け取り、今度こそ心からの笑みを返した俺の頭に、ある考えが浮かんだ。
幸せを否定するのはやめよう。
貰った幸せに心から感謝し、誰かに還元する。それが俺に今できることだ。
これまで以上に仕事に打ち込み、人の役に立とう。

そして、ニコラの未来と幸せを祈り続けて、心穏やかに再会を待とう。
最後にニコラの顔を思い浮かべていたところで、俺はクラウスの胸元をぽんぽん、と叩いた。
「クラウス、俺ならもう大丈夫。おまえ、昼食を食べずに俺を待っていてくれたんだろう？　休憩時間がなくなっちゃうから、早く騎士団の詰め所に戻りなよ」
「ああ、もうそんな時間か。君といると時間が過ぎるのが早いな。ではそうする」
うん、と俺が頷いて会話が締めくくられたものの、俺の夫は過保護だ。
父様との約束に違わず、王城外へ出る馬車がある場所まで俺と一緒に向かい、馬車が角を曲がるまで見送ってくれたのだった。
そしてその夕刻。
お義父様は、夕食の席でオウジュン殿下の『運命のヒバリ』発言をさらりと口にしてしまった。
「ん、まぁーー！　そんなことが？　いくらエルフィーちゃんが可愛いからって謁見中に言い寄るなんて、殿下ったらとんでもない方ね！　それも知らなかったとはいえ、つがいがいる既婚者に！」
お義母様は、興奮気味にそう怒っている。
クラウスは物も言わずに眉をひそめて、俺の手をむんずと握りこんだ。
心の声が伝わってくるようだ。
――「一国の王太子が俺のつがいに気安く触れるとはなにごとだ。他になにもされていないか」
実際にクラウスが人前で口にするはずもないけれど、もし俺の想像どおりの言葉を言いでもしたら、立派な不敬罪だ。

俺は少し面白くなり、ふふ、と笑った。
「大丈夫だよ。すぐに撤回してくださったから」
そう言いながら胸にかけたペンダントを指で挟み、陛下と殿下から聞いたヒバリの話をクラウスとお義母様に伝える。
お義母様は、俺とクラウスが一度目のつがいを解かれた際、このヒバリの音を頼りにクラウスと共に俺の元に駆け付けてくれた。だからヒバリが持つ謂れについてご存知だけれど、俺と同じくシャオレンの伝統工芸品であることは初耳だったようだ。
「それなら確かに興味を引くわね。王太子殿下が公の場で我を忘れるのは品位に欠けるけど、身分制度の厳しい国でも運命のつがい伝承を信じているなら、殿下にはオメガ性への理解がありそうね」
ちょっぴり批判を含ませながらも、お義母様はふむふむと頷いている。
俺の隣では、クラウスがまだ不満げな表情をしていた。
「なるほど、事情はわかった。確かにエルフィーはこのヒバリのように可憐だからな。だが高揚のあまりとはいえ、突然『運命のヒバリだ』などとエルフィーに言い寄るとは……」
そこで言葉を止めるクラウス。批判は呑み込んだようだ。
ただ、手は繋いだままで、さらに強く握り込んでくる。
まるで「エルフィーは俺のつがいだぞ」と示されているようで、その力強さが嬉しい。
俺もぎゅっと手を握り返して、さて夕食を摂るために手を解こう、とクラウスに目配せをした

時だ。
「そうそう。それでだが、殿下はエルフィーちゃんをシャオレンに招待したいとお考えのようだよ」
お義父様の言葉に、俺の視線はクラウスからお義父様へと走った。
「えっ？」
「本日の合議でエルフィーちゃんの話にずいぶん感銘を受けたそうだ。是非シャオレンに招いて、治癒魔法を開拓する協力を求めたいと陛下に仰っていたよ。殿下は明日、ラボの視察にいらっしゃる。その時に直接お話があるかもしれないね」
その言葉に、空回りともいえるあの熱弁を思い出して、顔から火が出そうになった。
けれど殿下は、確かに最後まで俺から目をそらさずに聞いてくれていた。そしてそこまで言ってくださるとは恐縮だ。シャオレンでの治癒魔法開拓に意欲を示してくださることも、素直に嬉しい。
ただ、俺に興味を示した殿下の様子が、アルファ至上主義のアーシェット宰相の気に障ったのは間違いない。だから宰相は俺にあのような侮蔑の言葉を連ねたのだ。
せっかく昼間にクラウスに慰めてもらったのに、今日のことを思い出してしまうと胸が重くなる。性懲りもなく周囲に気を配らずに突っ走ってしまった自分にも辟易して、再び落ち込んだ俺はクラウスの手をギュッと握り直した。
夕食を終えると、お義父様たちに就寝の挨拶を済ませて、俺たちの住まいがある離宮へと戻った。

すると主寝室に入るなり、クラウスが俺の前に跪いた。
片手を自身の腰に回して、もう一方の手は俺の手を取り額に付けている。
これはリュミエール王国騎士の、主君へ忠誠を誓うポーズだ。
「エルフィー。今夜の俺は君の従僕だ」
「どうしたの、突然」
そう言いつつも、なんとなく理由は分かっていた。
クラウスは俺の沈んだ心を察し、癒やそうとしてくれているのだろう。
俺の問いにクラウスは微笑んで、緩やかに首を横に振った。
「わたくしがそうしたいだけです。ではまず、湯浴みにお連れしましょう」
「わっ」
昼間とは違い、横抱きにかかえ上げられる。
そのままバスルームの前室に運ばれれば、まるで高価な置物のようにそっと椅子に下ろされた。
「さあ、衣装をお外ししますよ」
「待って。服を脱ぐのくらい自分でするよ」
クラウスのお芝居は、ロマンス小説が好きな俺の心をこしょこしょとくすぐる。
じわじわと恥じらいが生じて、俺はボタンを外そうとしたクラウスの手を阻んだ。
けれどクラウスは俺の手をそっと下ろさせ、丁寧に服を脱がせていく。
「いいえ。全てわたくしにお任せを」

……そう言うけど、でも、だけど。
クラウスの男らしい指が腕や鎖骨、胸を撫でてくる。その触れ方がなんというか官能を促すようで、つい甘えた声が出てしまう。
「従僕が主人の肌をそんなふうに触っていいの？　……あ、んっっ」
胸の先を指で掠められ、肩がビクンと震える。クラウスはなに食わぬ顔をして、また指を滑らせた。
「そんなふう？　わたくしはご主人様の肌に不調がないかを確認しているだけですが」
「嘘だぁ。ぁっ……クラウスっ……！」
ブリーチズを下ろされながら、クラウスにしか見せない秘所に触れられる。
途端に俺のそこは兆して、うなじからフェロモンを発してしまう。
「なんと敏感なのでしょう。我が主は本当に可愛らしいお方だ」
クスッと笑ってくるクラウス。
うう〜〜。揶揄われてる！　真面目唐変木な男が愉快そうな顔しやがって！
内心で文句をつけながら軽く睨むと、クラウスは裸になった俺を再び横抱きにして、大理石の浴槽がある室内へと進む。そして、自身は服を着たままで浴槽に足を入れ、俺を湯の中に下ろした。
「クラウスは脱がないのか？」
「ええ。わたくしは従僕ですので」
どこまでも従僕を演じるクラウスは俺の頭側の浴槽の縁に腰を下ろすと、湯を馴染ませながら俺

の髪を洗い始めた。
優しい指使いが気持ちいい。だけど時折、髪をぎゅっと握られる。
なぜだろうかと心地よさに閉じていた瞼を開くと、黄金色の瞳と視線がぶつかった。
「クラウス？」
どうしたのか、クラウスは苦々しい表情をしていた。
従僕とは思えないその表情に戸惑っていると、彼は低く唸るように漏らす。
「……実を言えば、他のアルファが君のこの髪に見惚れたかと思うと、胸が焼けるようだ。誰にもエルフィーを見せたくない。君のそのエメラルドの湖に俺以外を溺れさせたくない。シャオレンの王太子は君を瞳に映し、言葉をかけた以外になにをした？」
「あ……」
コーヒーの香りがブワリと漂った。いつもより香りに少し苦みがある。
これは、クラウスの――アルファの威嚇フェロモンだ。
威嚇フェロモンは、アルファが自身の優位性や領域を主張するため、敵意を抱いた相手のアルファに対して本能的に発するフェロモンだ。特に、愛するオメガへの強い独占欲が引き金となり、相手が領域に踏み込んだとみなせば、その香りは圧倒的な威圧感を持って香り立つ。
けれど威嚇する相手がここにいないせいだろう。フェロモンは俺に纏(まと)わりつき、まるで見えない鎖にがんじがらめにされているような気持ちになる。
苦しい……それなのに、心地いい。

俺は半分ぼんやりしながら片手を上げていた。
「手を……」
「手を握られた？」
その手を掴まれ、人差し指に歯を当てられる。
甘噛み、されてる……これ、好きだ。
クラウスは甘噛みを終えると指を吸い上げ、中指や薬指の先も甘噛みしたり、手の甲に口づけたりしてくる。「俺のものだ」と言わんばかりに。
嬉しい。もっと俺を独占してほしい。
俺はぼんやりとしたままクラウスを見つめ返した。
「ねえ、今夜は俺の従僕なんだよね？　俺の言うことを聞いてくれる？」
俺の言葉に、威圧的な雰囲気を霧散させ、クラウスが笑む。
「イエス、サー。お望みがあればお申し付けくださいませ」
「抱きしめて、それから口づけして」
クラウスの足の間に頭を挟まれている姿勢から、くるりと体を回転させる。太ももに掴まりながら顔を見上げて、そう命令した。
「仰せのままに」
俺の従僕は従順に頭を下げると、着衣のままで浴槽に入ってくる。
「違うよ、服を脱……ん、んん」

素肌で触れ合いたいのに、命令し終える前に抱きしめられ、唇を塞がれる。
男らしい厚みのある唇は適度に湿りを帯びていて、俺の唇も湿らせた。
顔の角度を変えながら何度か唇を吸われ、半開きの口の中に舌を挿し込まれる。
温かくてなめらかな感触と甘さに、胸が打ち震えた。
「ん、んん、クラウス……」
重なり合っている唇の隙間から、吐息と声を漏らして名を呼ぶ。
逞しい首に腕を回せば強く抱き返され、唇の重なりが深くなる。
舌が奥まで入ってきて、上顎を舐められれば、尾骶骨にまで甘さが響く。
濡れた服が肌を擦るのも官能的で、俺は小さなため息を漏らした。
だけど足りない。濡れたシャツの下に透けて見える逞しい胸と、じかに触れ合いたい。
「ね、お願い。服を脱いで」
口づけが首筋に移った時、俺はクラウスのシャツをたくし上げた。レースアップタイプのシャツだから、襟元の結びを解いただけでは脱がすことはできない。それに生地が肌にくっついて上手く脱がせることができない。
俺が懸命になっていると、クラウスは口角の上がった唇で口づけてから、浴槽内でシャツを脱ぎ去った。
その筋肉の隆起に目を奪われる。
「かっこいい体……。ねえ、下も脱いで？　ううん、俺にさせて？」

クラウスのトラウザーズのウエストに手をかける。
途端にクラウスが腰を引いた。
「いや、こちらも自分で脱ぐから」
「いやだ、俺がやる」
譲るものかと、俺は両方の手に力を入れてウエスト部分を掴んだ。
クラウスは湯水を跳ねさせて立ち上がり、またも逃げようとする。その際に、クラウスの大きなものがトラウザーズを破りそうなほど大きく変化しているのがわかった。
「凄い……。もうこんなになってたの？」
思わず衣越しに撫でてしまう。
クラウスは慌てたのか、足を滑らせそうになり、咄嗟に浴槽の縁に腰掛けた。
「俺が君の素肌を見るだけで昂ってしまうとわかっているだろう？　そう煽らないでくれ」
「煽っているわけじゃないんだけど……。とにかく、苦しそうだし脱いじゃってよ」
クラウスの両手が浴槽の縁にある今のうちだ。
俺は再びクラウスのトラウザーズのウエスト部分を持ち、力任せに下げた、その瞬間。
ぶるんと勢いを付けて飛び出したクラウスのものに、頬をペチン！　と叩かれた。
「わ、凶暴……ここまで間近で見るのは久しぶりだけど、やっぱり大きいね」
「……っつ、そんなに見ないでくれ」
クラウスは熱杭と化したそれを隠すように体を捻ると、結局自分でトラウザーズを脱いだ。続い

て、隠すように浴槽に入ろうとする。
俺は急いでクラウスの腰に触れ、再び縁に座らせた。
「駄目！　まだここに座ってて」
「エルフィー？　……うっ……」
クラウスは不思議そうな表情をしたけれど、すぐに体を強張らせて喉で唸った。
俺がクラウスの熱杭を両手で握ったからだ。
――大きい……熱い……ドクンドクンしてる。
ここに触れるたびにいつも同じ感慨を抱くけれど、実のところ俺はここの『味』を知らない。
いつもあっという間にクラウスに悦くされて、俺がしてあげる機会がないからだ。
だけど今夜は……
「エルフィー、やめるんだ」
「従僕は主に反抗しないの」
大きく口を開いて、あむっと咥えてみる。だけどクラウスの熱杭は露頭からもう大きすぎて、唇も顎も痛くなってしまう。ホントの先っぽしか咥えられない。
それでもクラウスは悩ましげな吐息を漏らし、腹筋をひくつかせている。
「っう……エル、フィ……」
クラウスが大の男なのに可愛い。
――愛しい……もっと感じさせたい。俺で悦くなってほしい。どうしたらできる？

そうだ、クラウスがいつもやってくれているように……大きいから全部は口に含めないけれど、段差のところや裏筋に舌を這わせて……
「もういいから、エルフィー。君には無理だ」
よし、と舌を出したところでガシッと両頬を包まれた。
「無理だって？　なんだよそ……」
ムッとしてクラウスの手を掴んでどかし、顔を見上げて一瞬呼吸を忘れた。
そこには切羽詰まった黒豹がいた。頬を紅潮させ、眉根を寄せて切なげに俺を見ている。
結婚後のクラウスはどんどん大人の男に成長し、交接でも余裕を感じてばかりいた。
だから久しぶりにこんな表情を目の当たりにすると、ぐっとくるものがある。
俺の背は興奮に震え、下腹がきゅうと収縮する。
同時に、自分でもわかるほどのフェロモンが匂い立った。
「……すき、クラウス」
ひとりでに甘ったるい声になる。クラウスの太ももに手を置いて支えにし、熱杭に顔を寄せた。
瞼を閉じ、鈴口の先からとろりと滴る蜜にコーヒーの芳香を感じながら、舌を当ててみる。
「ぐ……！」
クラウスが唸る。太ももが硬くなった。
同時に熱杭も硬度を増してそそり立つ。俺はそれを両手で握り、根本から上に向かって擦ってみる。舌を動かすのも休まない。舌の先も表面も、唇も使って夢中で口淫した。

「エ、ルフィ、なんて淫らな……目にも毒だ。頼むからもうやめてくれ」
「ん、ん、クラ、ウ……んっ！」
クラウスの香りと行為に蕩けていると、肩を押されて腰を引かれてしまった。
「やだぁ。まだ欲しいよ」
口から抜けた杭をねだりながら、クラウスを見上げる。
その直後だった。目の前でなにかが弾けて、俺の顔をめがけて飛んできた。
反射的に目を閉じると、クラウスが焦った声を出す。
「目に入っていないか！　すまない、俺はなんてことを！」
俺は一瞬なにが起こったのかわからなかった。
なんとなく顔を拭ってみると、生温かく、白いぬめりが指に付いた。
……クラウスが俺の口淫で達したんだ。
それが理解できた途端に嬉しくなる。
「やった、俺がクラウスを気持ちよくできた」
「なにを言ってるんだ。俺はいつも君に感じさせられている。それより顔を洗おう。本当にすまない」
「いつもって、それはクラウスが俺の中に入った時のことじゃないか。そうじゃなくて俺がクラウスに、能動的にしてあげたいんだよ」
顔を洗われながら不満を零すと、クラウスの黄金色の瞳の光が強くなったように見えた。

「……また君は、そうやって煽ってくる」
クラウスは少しばかり声を低くしてそう言うと、腰と腕に手を回してきた。
体の向きがくるりと回り、クラウスにお尻を突き出す姿勢にされる。両手はバスタブの縁に付くよう促された。
「俺を弄ぶ君にはもっと理解してもらわなくてはならないな」
「は？　なに言って……ぁっ、やっ！」
お尻を左右に開かれ、あらわになった後孔に舌を当てられた。同時に前を握られ、ゆるゆると、やがて速度を付けて上下に擦られる。
「や……だめ、一緒、だめ……」
「君に触れ、触れられるだけで俺は何度でも悦くなる。服を脱いだ時にも見ていたのにまだわからないか」
話しながらも、クラウスは後孔の襞を舐り、中にも熱い舌を挿入してくる。
「んっ、ああっ……わかる、わかるから、クラウス、クラウス、クラウスッ……！」
巧みな舌使いと前への刺激に翻弄される。体が痙攣し、膝がガクガクと震えた。
視界が白く霞み、思考の全てを甘い熱に熔かされる。
俺はクラウスが吐精したのよりもずっと早く、白濁を散らした。
「エルフィー、愛してる。俺の世界」
くったりと力が抜けると、クラウスが愛を説きながらかかえてくれる。

立ち読みサンプル
はここまで

「どんな強敵が現れようとも、俺は君を誰にも渡さない。君は俺だけのつがいだ」
唇だけではなく、額や頬、髪にも口づけが降ってくる。
その後寝室に移ると、深い愛情の分だけ何度も穿たれて、俺は今夜もクラウスに蕩かされるだけになってしまうのだった。

翌日、小春日和の空をヒバリが舞う四の月の始まりの日。
オウジュン殿下が侍従一名と護衛一名を伴ってラボを訪れた。
二十代後半と思われる侍従は、東方の国々共通の衣装である袍服を着ている。なめらかな藍色の生地で、頭にはピッタリとした同色の帽子を被り、結い上げた髪を収めているようだ。整った顔立ちながら伏し目がちで、物静かな印象を受ける。
大柄で剛勇な護衛は三十代後半くらいか。こちらも東方の国々共通の衣装である胡服を着用し、色は黒で、その上に甲冑を着けている。兜には黒い毛の飾りが付いていた。
殿下はといえば、今日も紫系統の荘厳な重陽着を身に纏い、きっちりと結い上げられた黒髪を見事な装飾の銀の髪飾りで留めている。王族らしい威厳あるアルファ、と表現すべきだろうか。
吊りがちな眦、黒い瞳、細い眉と唇は一見して冷たく鋭い印象を抱かせる。荘厳な装いと従者二名に恭しく仕えられている様子が相まって、威容をいっそう際立たせていた。
昨日謁見を済ませていた父様や俺だけでなく、オメガばかりのラボのスタッフたちは、許可が下りても低頭したままで畏まっている。

けれど殿下はそんな俺たちの挨拶に手を上げ、見た目の印象に反してにこやかに応じてくれた。
やはり殿下自身は、オメガへの差別意識や偏見が少ないのかもしれない。
今日は父様によるラボの案内と、数名の精鋭スタッフの研究室を巡回してもらった後に、俺の治癒魔法を見てもらうことになっている。
ところが、父様が案内を始めようとして声をかけると、殿下はそれをあっさりと退けてしまった。
「私はエルフィー殿の魔法を確かめに来ている」
その言葉に、俺と父様は密かに目を合わせて戸惑いを共有した。とはいえ断るのは不敬に当たる。
俺と父様は頷き合い、ラボのエントランスから俺の研究室へと直行することにした。
すると、殿下はここでも俺がいれば充分だと言って父様を下がらせ、二名の従者と共に研究室に入った。研究室の中では彼らを後ろに控えさせ、殿下は作業台を挟んで俺の対面に腰掛ける。
「さあ、早く魔法を見せなさい」
早速そう言うと、俺の手元を真剣な眼差しで見つめた。
俺は魔法陣を描いた布を敷き、その上に薬草を置く。
やってみるのは、すぐに成果が目に見える基本的な錬成だ。少し強めに魔力を出して、奇術のように速やかに、少しでも華やかに見えるように実演した。
「このように、魔法陣の上の薬草を粉砕します。さらに念じると、精製されて微粒子になります。次に固形化の魔法を加えるとこのように変化します」
「おお……！　本当に魔法だ！　手仕事では時間がかかる工程を一瞬で！」